

高橋瑞と荻野久作

安井 広

二人はともに現在の西尾市に深いかかわりを持つだけでなく、高橋瑞の姉アイが荻野久作の養父忍に嫁すという事実があった。

高橋瑞は一八五二年（嘉永五）十月二十四日幡豆郡西尾鶴ヶ崎村に六男三女の末女に生まれた。父驥六郎は西尾馬回り役で、和歌をたしなみ、没後歌文集『寿可流集』が出されている。瑞は九歳で父を失い、母もまもなく没したため、長兄夫妻に養育されたが、のち東京に出て苦難の生活を経験した。一八七九年（明治十二）自活の道に入るべく群馬県前橋の津久井磯子に就いて産婆術を学び、さらに櫻井郁二郎の経営する東京浅草の紅杏塾に入り、ここを卒業して一八八三年内務省産婆免状を取得したが、産婆となつたのは医師になるための学資をかせぐのが目的であった。しかしその頃女子には医術開業試験を受ける資格がなかつ

たため、同志をさそいあわせ、内務省衛生局長長与専齋に請願したが容れられず、仕方なく伝手を求めて大阪に行き、高橋正純のもとで医学を学んだが、翌年前橋に帰り産婆を開業した。一八八四年六月女子にも開業試験受験が認められたので上京して成医会講習所に入ろうとしたが、半年分の授業料を前納せねばならぬため断念し、済生学舎の門をたたいた。しかしこれも女子の入学を拒否したので會長長谷川泰と膝詰談判し、ついに入学許可を得た。翌年春季前期試験及第、後期には臨床試験があるため、幾多の曲折を経て順天堂で実地を学び一八八七年（明治二十）四月三十六歳で女医の資格を得た。登録番号二一七九。荻野吟子、生沢クノにつぐ三人目の女医である。翌年一月日本橋区元大工町九番地に開業したが、高橋はさらに女医の権威を高めようとドイツ留学を決意した。順天堂の佐藤進らは高橋の健康をうれい、これを取りやめるようすすめたが、高橋の決意はかたく一八九〇年ドイツに向かった。しかしドイツでも当時大学は女子の入学を認めていなかった。一時ポツダム病院に学んだが必死に歎願してベルリン大学の聴講生として婦人科教授ウォルスハウゼンらに就いて学

んだが、一年ほどのちに咯血したため、九十二年五月帰国して、さきの元大工町に開業した。開業中多くの書生に学資をみついだ。一九一四年満六十歳で診療をやめ、隠居して御歌所寄人遠山英一に就いて和歌の道に進んだ。二十七年二月二十八日七十六歳で死去。遺言により東京女子医専で解剖、死因は胸腺癌腫でクルブ性肺炎併発。三十三年十月世田谷区豪徳寺に彰功碑が建てられ、この時歌集『瑞雲集』が配布された。文芸評論家勝本清一郎はこの中の死を前にしての三首につき、西洋医学に打ちこんだ精神的態度の窮極が反映されていると言った(『医家芸術』八・六)。

なお高橋は『東京医事新誌』七六三号に「母体脚氣ト小児ノ腸胃病トノ關係」を書いているが、これはその前年弘田長が『東京医学会雑誌』五十八号に書いた乳児脚氣に関する論文を例証したものである。吉岡弥生は荻野吟子を女医の生みの親、高橋瑞を育ての親と称している。

荻野久作は一八八二年(明治十五)三月二十五日愛知県八名郡下条村(現在豊橋市下条東町字白石)の農業中村彦作の次男に生まれた。十七歳の時幡豆郡西尾町荻野忍の養子となり、姓を荻野と改め、中学三年から東京の杉浦重剛

創立の日本中学へ転校した。その後第一高等学校、東京帝大医科大学に学び、卒業後同大学産婦人科教室で木下正中教授の指導のもとに研究生生活に入ったが、経済上の理由で研究を中絶し、入澤、木下両教授のすすめで十二年三月新潟市竹山病院婦人科に就職した。二十二年から臨床のかたわら新潟医大病理学教室で川村麟也教授のもとで研究、二十四年「人類黄体ノ研究」により東京帝大から医学博士の学位を授与され、同年「排卵ノ時期、黄体ト子宮粘膜ノ周期的變化トノ關係、子宮粘膜ノ周期的變化ノ周期及ビ受胎日ニ就テ」を『日本婦人科学会雑誌』十九・六、一九二四に発表した。これが荻野学説でこれについての発想は新潟に来てから得たものであるという。

荻野はその後三十六年から竹山病院長となり、戦後五十二年新潟市名誉市民に推薦され、五十三年紫綬褒賞を受領、六十六年秋に勲二等旭日重光章受領、また「オギノ学説による人口問題への貢献」ありとして朝日文化章が授与された。荻野はその後も臨床をはなれることなく一九七五年一月一日死去した。荻野の功績は人類生殖の基礎をつきとめたものとして評価される。

養父忍は分限帳に三人扶持助教方とあり、漢字を教えていたという。のち旧藩主のもとで日本赤十字社に勤めていたが、久作が新潟に就職する時一緒に移住した。

(愛知県)

解剖用女性人体模型と

S・エルドリッジの手紙

松 木 明 知

一

米国ワシントンのウォルターリードメディカルセンター内にある陸軍医史博物館は、正式には、Armed Forces Medical Museum of the Armed Forces Institute of Pathology と称するが、これまでに日本にはほとんど知られていなかった。

演者は、エルドリッジの手紙を解読している中に、同博物館に日本製の医学教育用人体模型が二体所蔵されていることを知ったので、昭和六十二年七月同館を訪れ調査したので、その概要を報告する。

木製の人体模型は二体ある。いずれも身長は約一米位の女性である。一体は女性の臥位で胸腹部の臓器が観察可能になっており、腹部では子宮に胎児を見る。もう一体は座